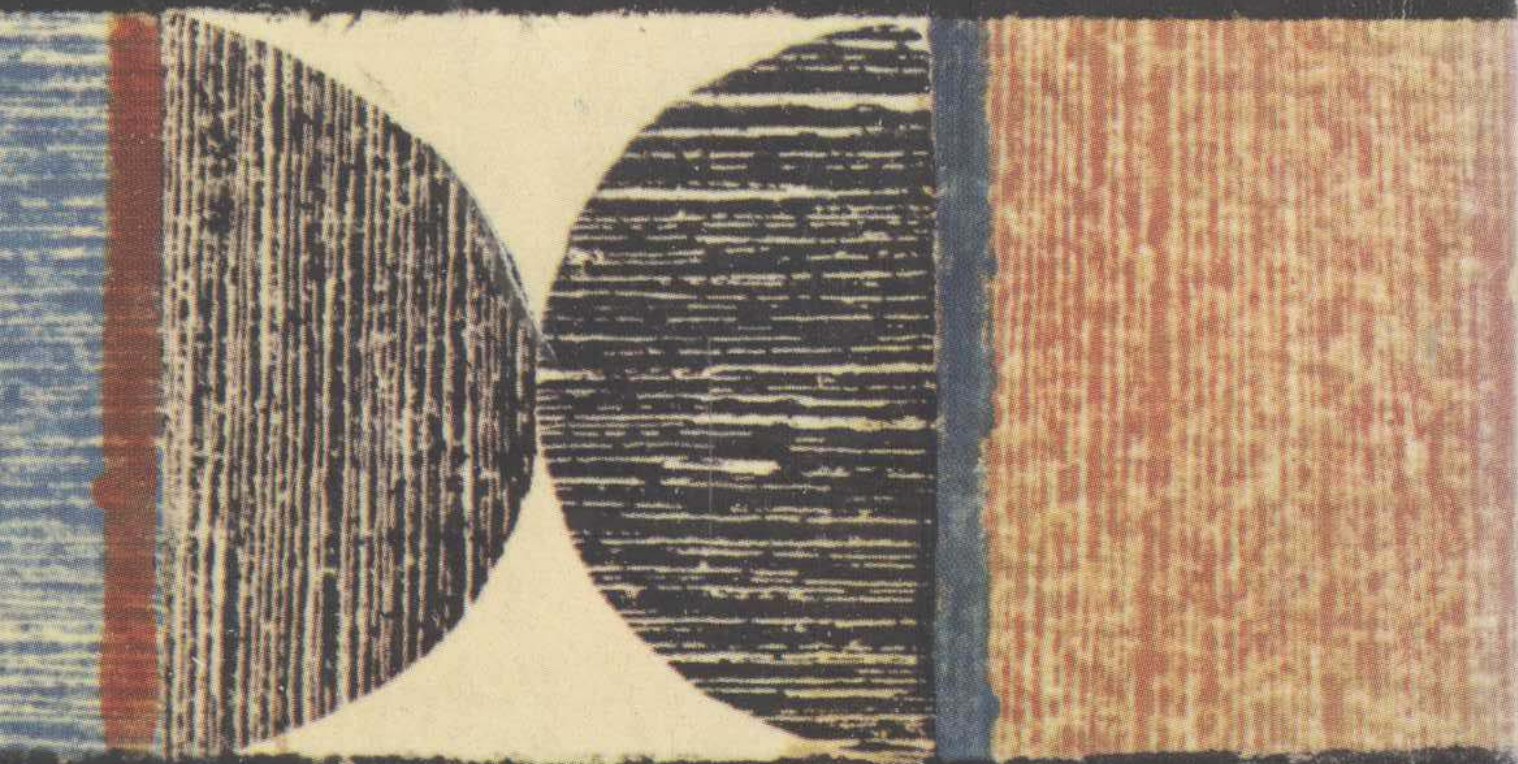
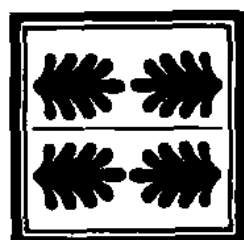


夜の鶴

石川達三





講談社文庫

夜の鶴

石川達三

昭和47年 2月15日第1刷発行

昭和49年 4月28日第8刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 有限会社中沢製本

© Tatzuo Ishikawa 1972

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

夜の鶴

石川達三

目次

夜の鶴

解説
年譜

浜野健三郎

二五
一九

七

夜の鶴

I

先日は失敬しました。恐らく君にとってはあまり愉快でない、居心地のわるい二時間だったろうと思います。どうか気を悪くしないで貰いたい。私自身も若い頃に一度は経験して知っていることであるのだから、君を嫌な気持ちにさせないように、せい一杯に砕けた態度でお会いしようと考えて居たのですが、やはりあんな風に、根掘り葉掘り、君の戸籍しらべみたいな質問をしないでは居られなかった。已むを得ない当然の手続きだったと思ってもらいたいのです。君は最後までよく我慢して、私の無礼な質問に答えてくれたと思います。お別れして帰る車のなかで、私は君から受けた印象の後味をかみしめて居たのですが、君の経歴とか職業とか血統とかいうことは別に、君の人柄のなかにある誠実なもの、謙虚なものが感じられて、私は嬉しかった。

実を言うとおの日、君に会いに行くときの私の気持は、かなり意地わるなものだったことを、私は知っています。少くとも君は、私の手から最愛の娘を奪い取ろうとする、敵だった。たとい君がどれほど深く滋子を愛して居ようとも、またその愛情によって滋子にどんな幸福な生涯をあたえてくれようとも、親の手から娘を奪い去るという事実に於て、君は私の敵だった。

これは運命というよりほかはない。古来、すべての娘たちは、成長すると共に父をはなれて、愛する者と二人きりの生活にはいつて行つた。彼等の幸福な結婚のかげに、絶えざる父の歎きが

ある。人類の歴史を、もしも愛情と結婚との歴史であると云う見方をするのならば、それは同時に、置き去りにされた父親の、何百世代にわたる歎きの歴史でもある。

けれどもこの歎きは、抵抗する術もない、力弱いものであるのです。釈迦は生老病死という四つの苦悩によって人間の運命を悟ったけれども、世代の交替という歎きは、老いよりも病よりも深いものであると私は思う。病には抗らう術もある。老いの来るのを防いでいくらかでも先へ延ばす方法もある。けれども世代の交替はどうにもならない。この娘は父が丹精して育て上げたのです。その美しい成長にどれほど大きな願いをこめて来たかわからない。ところが成長ということとは同時に、別れ去ることであつたのです。解り切つたことだけれども、この矛盾には耐え難い思いがします。

従つて私の気持のなかには、別れの時を先に延ばしたい感情があつた。今もあります。いつまで続くものでもない、一寸のばしの、優柔不断な気持であることは、自分で知つて居ます。知つて居りながら、せめてもう一年か半年か、娘といっしよに暮して居たい気がする。同時にまた、どうせ行つてしまうものならば、早く行つてほしい気持もある。

娘の縁談というものは辛いものです。無心にピアノを弾いて居るうしろ姿を見ながら、いつまでこうして居られるのだらうかと思ひ、静かに編物などして居るのを見ると、心のなかでは誰かを待つて居るのではないかと疑ひ、父親はいつもはらはらして居るのです。新しい洋服を着ても、髪をきれいに結いあげても、あの子のすること為すことすべてが、私の家を出て行くための準備のように思われる。

そういう被害妄想みたいな思いをして居るところへ、天野吉信という青年が現われた。来るべきものが来たというほかはない。私も妻も覚悟はしていたのですが、覚悟ということと未練ということとは別のものであるらしい。私の気持は二つに分裂していました。君が滋子にとって最も望ましい良人であってくれればいいという願いと、もう一つは、君がまるで良人としての資格に欠けた青年であってくれればいいという気持と。……後者ならば私は断乎として反対することが出来る。自信をもって拒絶することが出来る。しかし前者である場合には、私はあきらめなくてはならない。

不思議なことには、私の妻はかなり私とは違った気持をもっているらしいのです。同じ親でありながら私と幹子とは感じ方がまるで違っているのです。彼女は娘が結婚するということに、何かしら無条件に喜びを感じているらしい。滋子のために洋服だの装身具だのを選び、買いととのえ、近い将来のために準備する、その具体的な行為に新鮮な幸福を感じているのです。そして私には、娘のために具体的な準備をしてやるような事は一つも無い。私は手持ち無沙汰で、二人の女から置き去りにされて、いつまでも決心がきまらなくて、ちっとも嬉しくないばかりでなく、何だか憂鬱でたまらない。妻が滋子のための買物をたのしんだり、買物の相談をしたりしている様子を見ると、悪口を言っただけでやんわりとやる。幹子にとっては、娘の良人になる人がどんな男であろうとも、兎にかく娘が結婚するということは、それだけでもう十分に幸福なのではないかという気がする。それで私は腹を立てる。馬鹿々々しく思われてならない。

ところが幹子は、まだ十六にしかない男の子に関して、将来彼が迎えるであろう妻のこ

とを、重大な関心をもって考えているのです。お母さんがちゃんと見て選んでやるだとか、色の黒い女は嫌だとか、背の低い女は、やめなさいだとか、今から心配する必要もないことまでくどくどおしゃべりをして居る。私はまた逆に、息子の嫁のことなどはちっとも心配しなくてもいいと思うのです。息子は勝手に自分の好きな女を探して来るだろう。よほど変な娘でない限り、少々どっちだって構わない。息子にまかせて置けばいいと考えている。

こういう喰い違いは私たちの嫉妬かも知れません。幹子は息子の嫁になるべき女に嫉妬を感じ、私は滋子の良人になるべき青年に嫉妬するのだとも言えるでしょう。幹子は君に対してすこしも嫉妬を感じないらしい。君を敵として感じているのは私だけです。そういう本能的な嫉妬がつまらない感情であることは解って居るが、無用な感情であるとも言えない。私はそういう嫉妬の眼をもって、娘に縁談のあった相手を仔細に観察し、研究し、あら探しをやり、意地のわるい試験官のようにそれとなく試験をし、点をつけ、そしてなるべくなら相手を落第させてしまおうとする。そういうやり方で今日まで、五人も六人も青年を落第させて来たのです。

そういう意地わるなやり方が、一方では親としての大義名分でもあったのです。つまり、娘のために最もふさわしい良人を選んでやるのが父親の義務であるということ。従ってそれは私のためではなくて滋子のためであるということ。そのためには私は冷静な意地わるな試験官でなくてはならないということ。

これは一種のエゴイズムであることは間違いありません。すべて自分の娘だけの為を考えているのであって、相手の青年などはどうでもいいのです。その青年にすこしでも資格に欠けている

と思われるところがあれば、容赦なく拒絶してしまうことが出来る。拒絶された青年がそのために絶望的になろうが自信を失なおうが、こっちの知ったことではない。そういう手前勝手な考え方です。

しかしそんな風なエゴイズムも、結婚に伴う当然な行為であるかも知れない。結婚は、何千何万の異性のなかからお互いに一人だけを選ぶのです。選ばれなかった人たちに同情する余地はない。この場合、ヒュマニズムなどという考え方は問題になりません。エゴイズムによる選択を終わってから後に、かすかなヒュマニズムが有るという程度のものでしょう。君にしても、いま、どれほど私の歎きを聞かされたところで、滋子との結婚をあきらめる気はないでしょう。君は私の手から娘を奪い、勝利の歌をうたい、私が淋しい思いをしているとき、君は新婚の喜びにひたっていて、私を顧みようともしない、そういうエゴイズムを実行しようとして居るのです。その意味から言っても君は私の敵にちがいない。

このあいだの君と二人の会談は、謂わば敵と敵との対談であつた。ちかごろ流行の言葉で言えば冷戦でしょう。私は娘を奪られまいと防禦する立場。君は巧みに私の眼をくらまして滋子を瞞し奪ろうという策略……。したがって君の心のなかにも複雑なものがあつたに違いない。私を怒らせないように、私に信用されるように、立派な青年だと見られるように、しかし、あまりに温厚で却って意気地なしだと思われたりしないように、一挙一動に心を配って、箸のあげおろしにも注意していたに違いない。そういう身のこなしの堅さが私にはちゃんと解つた。解つたけれども、私は悪くは解釈しませんでした。堅くなっているのはそれだけ君がまじめな証拠だと思いま

した。私をたぶらかす策略というのは言い過ぎです。

そして私自身は、一種のジレンマに陥っていたと云わなければならぬでしょう。君が滋子にとって適当か不適当か、それを私は探り知らねばならない。もし不適当であるならば、この敵は大した敵ではない。もし適当な青年と思われるならば、私にとっては抗う術もない強敵です。そして、縁談をきめてしまふ以前には、私の方に一切の選択権があり拒否権があるので、私は何とでも言えるけれども、二人が結婚してしまえば、それからあとは私の方には何の権威もなくなる。私は君に妥協を申し込み、君の機嫌をとり、滋子が君の氣に入るように、その事だけに氣を配らなくてはならなくなる。

したがって、あの夜は娘の父として、存分に君に質問したり揚げ足をとったり君を試験したりすることが出来る立場ではあったが、後々のことを思うと、変にみぞおちのあたりに冷いものを感ずるのでした。

君の戸籍しらべみたいな質問や、思想調査みたいな無礼な質問をたくさんしたけれども、必らずしも私に悪意があったという訳でもないのです。何か君の身边から欠点をさがし出して、縁談をおこしやりしようという程の考えではなかった。そういう意地わるな氣持がまるで無いわけではなかったが、一方ではまた、君が信賴できる青年である幾つかの証拠をさがし出して、早く安心したい氣持もあったのです。本当を言えば、どれだけの立派な証拠を示されても私は安心など出来はしない。もし安心できる親が居たとすれば、それは怠惰と思います。安心はできないけれども、とにかく私が自分をあきらめさせるための口実がほしかったのだと言ってもいいでしょ

う。

こんな文句を君にむかつて書いているのは、父親の愚痴です。決心がつかぬままに、安心も出来ないうちに、仕方なしに諦めようとする。みつともない愚痴です。こういう愚痴を許していただきたい。私はいまさらながら、女というものの憫れさに胸が痛み、女の世界の狭さに腹を立てるのです。年頃になったからと言って、何も嫁に行かなくてはならぬとは限らんだろう、と言ってやりたい。ところが世界中のあらゆる女が、二十三四にもなると、まるで流行病にかかったように、一斉に気持が怪しくなり、仕事も勉強も手につかなくなり、近づいて来る青年の足音や気配にばかり心を奪われて、結婚すること以外の何も考えなくなってしまう。私はそんな当りまえな事にさえも腹が立って、滋子に意地わるを言っでやりたくなる。滋子がわるいのではなくて、私が淋しいのです。これまで二十三年間、いつくしみ育てて来た私の愛情が、裏切られたような淋しい思いがする。

こんな事を書いて、君に同情を求めようなどと云うのではありません。君は君らしく、堂々と、私の手から滋子を奪って行くがいい。どうか堂々とやってのけて貰いたい。私が手も足も出ないほど堂々と、勇敢に、立派に奪い去ってもらいたい。その方が私は安心する。あれだけの男なら滋子を奪られても仕方がないと思うことが出来る。つまり私を立派にあきらめさせて貰いたいのです。

あの翌日、私は滋子の気持を聞いてみました。お前は一体どうなんだ。本当の気持を言ってごらん。これからさき一生、天野君を愛して行けると思うのかね。愛情も愛情だが、冷静に考え

て、性格だとか趣味だとか、相手の職業、思想、そう言ったいろいろの条件を考えてみて、うまくやって行けると思うかね。結婚ということはやはり一生に一度きりでありたい訳だし、失敗しないように始めからよく考えて置かなくてはならないのだが、……結婚してもいいと思うかい？ これもまた無理な質問です。代数の問題を解くように、さらさらと一つの答が出せるような話ではない。これからさきの一生を愛して行けるか行けないか、そんな事が誰にわかるものか。解りもしない質問をされて、滋子は返事に窮してしまいました。可哀想に、ジレンマに追い込まれて居たのです。一生愛して行けると言えば嘘になるし、愛して行けないと言えば結婚の条件はそろわない。私は答えるのできない質問をして、娘を困らせていたのです。古今東西を問わず、何百年もの昔から、すべての父親はそういう質問をして娘を困らせ、娘は答えかねて溜息をついて居たわけです。

溜息のあとで、思いあまつたように滋子は言うのでした。

「お父さんはどう思うの？」

「お父さんじゃないよ。お前の結婚のはなしじゃないか。お前はどう思うんだ」

散々迷わせておいて、お前はどうかと言われても、早速に巧い返事が出来るはずはありません。

「だって、解らないんだもの。……お父さんがいけないと思うんだったら、わたしやめるわ」

こういう娘らしい言い方を、誤解しないようにして貰いたい。この言葉をもって、滋子が君を愛していないとか、愛情が足りないのだとか考えたら間違いです。（わたしやめるわ）という言

葉は、親に対する反抗の表現です。やめる気などは毛頭ない。私が承知すれば忽ち君のところへ飛んで行く。そういう感情をじつと押えて、親の意見に従うようなことを言っているのは、親に対するあの子のいたわりです。二十幾年を大切に育てられて来た、その恩義や愛情を充分に知りつくしているのです、好きな人ができたからと言って、早速には飛び出して行けない。それでは義理もわるいし、親が可哀想だと思っているのです。これは結婚にあたってすべての娘たちが経験しなければならぬジレンマ、運命的に避け得られない心の矛盾です。

そのうえ、結婚には巨大な不安がある。予想できないものが沢山ある。幸福になるかも知れないが、ひどい不幸になるかも知れない。そういう怕さがある。そこへ行くと両親の家庭には、さし当って何の不安もないし怖いものも無い。その安全な家をはなれて不安な結婚に飛びこんでゆくためには、よほどの決心がなくては済まない。逡巡する気持がおこるのは当然です。

しかし、恐らく滋子はもう決心がついているのでしょう。私はそう思う。彼女の逡巡はむしろ私に対するいたわりの気持の方が多いのではないかと思うのです。滋子はそういう娘です。やさしくて、思いやりがあつて、自己を主張することの少い娘です。主張するような自己をもたないのではない。なかなか芯のしっかりしたところも有る。学生時代にはともかくもクラスの幹事とか委員長とかいう仕事をやって来た娘ですから、それだけのものは持つて居るのですが、家庭ではそういうところをちつとも見せない。自己を主張する必要を感じないらしい。それだけ深く親たちを信頼しているのだらうと思います。（お父さんがいけないと思うんだったら、わたしやめるわ）という言い方のなかにも、抵抗と信頼とが同時に含まれているのです。